

土から育てる大規模畜産経営

- 鹿児島県鹿屋市 平松グループ -

本誌編集部

スタートは10頭規模の繁殖経営

鹿児島県鹿屋市に本社を構える平松グループは2021年4月末現在、全体で総飼養頭数約1万3000頭を誇る巨大畜産グループである。ただそのスタートがわずか10頭規模の和牛繁殖経営(平松畜産)だというと、多くの方が驚くのではないだろうか。自宅の庭先で数頭の牛を飼う兼業農家から、現在の土地へと移って母牛10頭規模の繁殖専門経営を始めたのが昭和58年(1983年)のこと。平成21年(2009年)に肥育を始めて一貫経営へとシフトし、現在の1万3000頭規模(うち繁殖3850頭)まで進化していくわけだが、そのスピード感も加速度的。これを平松正弘代表取締役が1代で築き上げたのだからまた驚きである。

本特集ではとくに若手の方にスポットを当てており、同社でも昨年からは平松社長の長男である平松大将氏(25歳)が就農し、主に肥育部門や導入・販売に携わっている。記者もまた食肉市場にて大将氏と知り合ったことが今回の取材のきっかけであり、本取材においても大将氏にご対応いただいた。ただ総じて若手の話



平松大将氏

というよりは、記事の大半が平松グループの多岐にわたる経営内容の紹介になることをご容赦いただきたい。

土から育てる和牛

平松グループは現在、畜産部門の本体であり繁殖部門の平松畜産(株)(平成28年に法人化)、肥育部門の(株)ひらまつ、牧草加工・販売の(株)ヒラチク、さらに鹿屋市と徳之島で繁殖を展開する(株)ティダファーム、同じく徳之島で繁殖を営む(株)大将グローバル牧場、そして飲食と精肉販売を行う(株)M・Hコーポレーションの6社で構成されている。今回の取材では、グループ最大の農場である鹿屋市の本社農場を訪れた。本社農場には和牛繁殖・肥育(一般肥育と経産肥育)、さらにデントコーンだけで120haにおよぶ畑での飼料作物の栽培、それを飼料化する自社TMRセンターがある。なお繁殖3850頭のうち本社には3250頭があり、残り600頭は徳之島で飼養されている。

平松グループの基本理念は「土から育てる和牛」であり、大将氏も「牛を育てると堆肥が出ます、それを自分たちの畑に返し、そこでデントコーンや牧草を作ります、それをまた牛が食べます、という形ですね」と語るとおり、循環型畜産の考え方が土台として根付いている。「社長がいつも言っているのは、僕らは“資源を作っている”ということです」と大将氏。子牛は畜産を営む資源であり、そして彼らを育てるための餌もまた資源であり、それは土からできてくる、ということだ。この思想は小頭数の繁殖経営だった頃から変わっておらず、同社では当初から飼料資源を重要視していた。急速な規模拡大を進める上で大きな課題となるのは、飼料の確保と堆肥の処理だ。平松グループでは、まず飼料資源の確保、さらに堆肥の受け皿としても畑の存在がキーになっており、まさに土を基盤



植え付けがすんだばかりのデントコーン畑。写真では到底取めきれないが、道路の向こうも含めて一帯が平松グループの畑

としてここまで拡大してきたといえる。

こだわりの発酵TMR

平松グループでは平成28年にTMRセンターを設立した。以前からミキサー車による都度の混合でTMRを作成していたが、品質にムラが出てしまうこと、さらに飼料基盤に基づいた規模拡大を進めるべく、センター設立へと至ったのである。TMRは全ステージで用いられており、その内容は粗飼料を主体としたもののほか、発酵させたデントコーンを主体とした栄養価の高いデントミックス、育成ステージ専用のものなど様々。詳細は企業秘密だが、その内容や飼料成分は自社で試行錯誤を重ね続けているようだ。

特徴的なのは、デントコーンを「最低でも半年、長

いものでは1年以上寝かして使う」ことである。デントコーンは収穫後に密閉状態で前述の期間発酵させ、さらにTMRとして混合後もラップして約3ヵ月ほど寝かせたうえで給餌している。当初はあまり寝かさずに与えることもしていたそうだが、大将氏によれば「酢酸臭というかつんとした匂いがありました。それが3ヵ月くらいで甘い匂いになってきます」とのこと。デンプンが糖に変わることでの変化と見ており、牛の嗜好性が高まるだけでなく、消化率と栄養効率の向上も期待できる。さらに最近、ハーベスターとしてクラス社のジャガー (CLAAS-Jager860) を導入。7000万円という高額な代物だが、収穫時にデントコーンの子実を切断し、さらに内部のローラーですり潰す機能が付いていることから、「発酵菌がアタックしやすくなり、消化率が上がる」という効果が期待できる。

混合後の密閉方法にも一工夫がなされており、松本エンジニアリング製の機械を使って徹底的に圧縮した上でラッピングしている。ラップの表面は岩のように固く、気密性が非常に高いため嫌気性発酵により適した状態となるのだ。このようにサイレージ作りに多くの手間暇と投資を注ぐのは、それだけ牧場にとって重要だから。実際にサイレージの品質の安定性は都度混合していたころと比べて著しく向上し、栄養面の安定により肥育・繁殖それぞれの成績（繁殖ではとくに分娩間隔）にもはっきりと良い効果が見られているという。夏場の腐敗やカビの発生もなくなり、廃棄ロスや吸着剤等に要していた経費の節減効果も。さらに現在、TMRは日量50t必要だが、センターは70t/日の製



TMRセンターのラップベールマシン。右手のシリンダー部分でTMRを強烈に圧縮し、ラッピングしていく



包装したてのTMRのラップ。表面は岩のように固い



ずらりと並んだ親付け牛舎。奥まで全て親付け牛舎だ



親付けは親5頭・子5頭1組で1マスのスペースはかなり広い。左手は子牛だけが出入りできるスペース

造能力を持っているため、機械を止めての定期的なメンテナンスが可能で、休日の確保にも役立っている。大将氏は「時間の掛かる作業をしていますが、それだけの効果は出ています」と話していた。

哺育管理は親付きで

次は、この飼料基盤の上に成り立つ畜産部門の特徴について紹介する。まず繁殖で最大の特徴は、本社だけで母牛3250頭という大規模経営でありながら、生後3ヵ月齢まで親付けしていることだろう。妊娠鑑定済みの母牛は約300頭1群の大規模フリーバーンで管理され、分娩1ヵ月前に分娩舎へと移される。分娩そのものはほぼ自然分娩で対応しており、1日7頭程度と生まれる頭数も多いことから、分娩後は状態を見ながら1組1マスの集中管理牛舎へ移動。ここではとくに子牛に下痢などの発生がないか重点的に観察する。そして同時期に生まれた牛たちで今度は1マスあたり親5頭・子5頭の群管理へ。ここで3ヵ月齢まで親付けで管理するのだが、膨大な数の母牛と子牛を親付けにしているため、本社農場には8棟もの大規模な親付け牛舎が並んでいる。母牛の飼料はTMRのみで、通常の繁殖用TMRと、授乳期用の高栄養なTMRの2種類を用意している。一方で子牛も生後半月程度からTMRを与えはじめており、親付け牛舎には子牛のみが入れるスペースを用意している。

正直なところ、この頭数規模で哺育期を親任せにしている経営体というのは、記者も初めてみた。生後まもなく親から離してハッチで人工哺乳し、その後は口



首に@MOWMENTのセンサーを付けた子牛

ボット哺乳で管理する、というのがメガファームクラスの繁殖では一般的という認識である。しかし平松グループでは「とにかく自然に、が社長のモットーですので」（大将氏）という考え方のもと、頭数をカバーするだけの牛舎を用意して親付けを実現している。

さらに最近導入した子牛用のIoT機器「@MOWMENT (アットモーメント)」も、管理面での大きな助けになっている。埼玉県のリブストック・アグリテクノ(株)が開発した機器で、首に装着したセンサーで子牛の活動量を測定し、体調不良や病気が表に出てくるよりも早く、子牛の活動低下を察知して早期治療を可能にするもの。首のセンサーは震動により自家発電するため、半永久的に使用でき重量も軽い。平松グループはこの機器の導入第1号だが、「導入し始めてすぐに数字が変わりました。見た目には普通の子牛でも活動量には変化が出ていて、体温を測ってみると熱がある。早期発見・早期治療ができるので事故はもちろ

んですけど、治療が長引いたり点滴をしなければならぬような子牛も激減しました」と大きな成果を上げている。熟練の目がなくとも異常を感知できるため、「新人でも子牛の異常を見つけられる」というのもポイント。過度な人員を掛けずに繁殖の多頭化を進めるうえで、非常に有効なツールとなっている。

牛に無理をさせない肥育

3ヵ月齢で離乳した子牛は肥育に向けた育成段階へ。ここでは腹作りやフレーム作りを重視した内容の育成専用TMRを与える。平松グループは子牛の販売はしていないため、あくまで肥育を目的に無駄な脂を付けない管理を心がけている。以前は9ヵ月齢まで育成していたが、TMRの内容が安定したことで母牛の栄養状態が改善し、結果として子牛の発育も良化していることから、現在は8ヵ月齢程度まで育成の終了時期を早めているようだ。肥育に移る段階での体重は、去勢であれば推定290kg程度とのこと。

肥育（一般肥育）に入ってもTMRの給与は続くが、同時に配合飼料の給与も始まる。前期は粗飼料主体のTMR、そして後期は仕上げに向けてデントミックス（デントコーン主体の発酵TMR）を与えることで、結果として配合飼料の総給与量は一般農家に比べて大きく抑えられている。全期間通じてビタミンAを切ることは全くなく、大将氏いわく「増体重視ですね。A5を目指したことは今まで一度もないです」と、できるだけ自然に、牛に無理をさせない肥育を心がけている。出荷月齢は去勢で約28ヵ月齢、雌では29ヵ月齢程度。現在、去勢の枝重は平均530kg前後だが、今後は前述したとおりTMRの安定で発育の良化した牛たちが続いており、「550kgを超えてくると思います」との見込みだ。

ちなみに4月に開催された福岡食肉市場開場記念ミートフェアでは、平松グループ出品の2頭がいずれもBMSNo.12を記録している。意図してA5を目指さずとも、牛の能力を引き出すことでこのような枝肉ができていたのもまた事実である。

こだわりのマザービーフ

平松グループの大きな特徴のひとつは「経産牛肥育」

に取り組んでいること。まず平松グループでは、母牛はお産が可能なかぎり使い続けることを前提としている。種付けに一定の期限を設け、そこまでのあいだに受胎した母牛は年齢を問わず生ませる。繁殖母牛は自家保留がほとんどであり、結果として自然と、子出しに優れた母牛の一族が構成されていくという形だ。一方で、繁殖に適さなくなった経産牛については、肥育へと移行することになる。

一般的に経産牛の肥育期間はそれほど長くはないと思うが、平松グループでは7～8ヵ月、しっかりと時間を掛けて肥育する。そして与える飼料はTMRのみで、とくにデントミックスを多給する。3～4ヵ月程度の肥育でも十分に肉付きは良くなってくるが、しっかりと時間を掛けること、そして消化率の高い発酵TMRを用いることで、一般的な経産牛よりも肉質・脂質に優れ、食べて美味しい牛肉が生産できている。「どちらかという黄色みがかかった融点の低い脂が特徴で、最初は評価されづらい面もありましたが、今では価値がどんどん高まっています」と大将氏も手応えを感じている様子だった。

経産牛は市場出荷後に枝肉セリに参加して通常購買し、グループの精肉販売・飲食店部門で「マザービーフ」として自社販売している。エイジングビーフというと肉そのもの熟成させたものを指するのが一般的だが、平松グループでは1年以上寝かした発酵TMRによる飼料のエイジング、そして年齢を重ねた経産牛という文字通りのエイジング、さらに肥育期間を長くとることでのエイジングを意識している。マザービーフはこれら自然なエイジング手法と、さらに徹底した循環型の生産背景も相まって、消費者から厚い支持を得ているようだ。

平松グループでは鹿屋市の本社からほと近い場所で、精肉・惣菜販売とレストランの「Beef Collection HIRAMATSU」を営んでおり、月1回の感謝祭の際には開店前の早朝から行列ができるほど人気を博している。このほか鹿児島市内にてステーキダイニングの「炭火ステーキ『听-pound』」を展開しているほか、ネットでもマザービーフの販売を行っている。飲食店や小売に取り組み始めたのは平成26年のこと。とくに本社近くのBeef Collection HIRAMATSUができてからは、現場の意識にも変化が出てきたそうで、大将氏

は「それまでは現場サイドで美味しさへの意識は薄かったと思います。地元到店舗ができたことによって、友人・知人から“あそこのお肉美味しかった”といった話を聞くようになり、現場でも“もっと美味しい肉を作ろう”という意識の変化があったと聞いています。牛から肉へ、自分たちの作っているものについて考えが変わった瞬間ですね」と振り返った。

6次化を超えてもう一度原点へ

これだけの飼養頭数を抱え、大規模な畜産事業を展開している平松グループだが、堆肥の外部販売を行っていないというのもまた驚異的な点である。分娩房やその後の親付き牛舎などは頻繁に大鋸屑を入れて牛床を清潔に保ち、これを戻し堆肥として活用しつつ、一方で肥育については牛床に厚みを持たせるためあまり堆肥を出さない、といった工夫が為されている。そしてなんといっても畑の存在。頭数を十分にカバーする広大な畑があるからこそ、堆肥をすべて自社で利用しきれているのである。

日本の畜産においてかねがね問題視されているのは、輸入飼料に頼った飼養形態と、それによって発生する堆肥の行き先である。「土から育てる和牛」を地で行く平松グループは、まず循環が可能かという視点から規模拡大が進められている。同社では現在、新たにTMR第2工場を建設中であり、さらなる規模拡大にむけて足場を固めているところだ。

このように牛に無理をさせない、できるだけ自然な畜産を求める一方で、経営面も決して軽く見てはいない。TMRセンターや機材への投資による業務の効率化、さらに生産の安定化を図ることで、これだけの規模でありながら本社の従業員は総勢50名程度に留まっている。しかも分娩担当として順番に夜勤がある以外



Beef Collection HIRAMATSU

は、基本的に定時出勤・退勤でしっかりと休日も確保されているのだ。

このような巨大畜産グループを一代で築き上げた平松社長、その長男である大将さんは昨年5月に就農した。以前からいずれ家業に携わることを考えてはいたそうだが、まずは東京の食肉業者に勤めて勉強を積み重ねていた。そこにきてこのコロナ禍である。「もしコロナがなかったらまだ東京にいたかもしれません。でもいざ帰ってみると、帰ってきて良かったなと思います」と大将氏。本社農場では繁殖・肥育・飼料作りと生産に関するあらゆるジャンルが網羅されており、「ひとつだけでなく色々なジャンルがあるので、毎日勉強になりますし楽しいですね」と現場から得るものは大きい。現在興味を持っているのは雌牛の持つポテンシャルについて。「雄は肉になることしかできませんが、雌は子供も産めるしお肉にもなれるし受精卵を取ることもできる、色々な選択肢があるなど感じています」と、雌牛のさらなる活用方法を思い描いているようだ。

そして平松グループ全体としては、「6次化産業はすでに実現できました。ただ次はこれを7次・8次と進めるのではなく、もう一度0に戻るという方向性で進んでいます」という。畑から飼料を作る、母牛から子牛を生ませる、グループの基本的な考えである資源を作るということ、「0から1を作る」という基本にもう一度立ち返り、今後も様々な事業展開を進めていく計画だという。

(荒木 太郎)